



海外 稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

登録稲門会 検索

現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

2016年10月、在留邦人約3,000人のうち10人程度の人数が集まると見込んで、カンボジア稲門会設立準備会を開きました。思いの外多種多様な人たちが集まり、官民、大企業からベンチャー、非営利組織に属する方まで登録ベースで60人がそろい、情報交換の場となっています。このように、幅広い人材が集まっているのも当会の特徴だと思います。
私は学生時代、理工学部建築学科の石山先生から、「建築や都市を設計するに当たり、東大は

国をシステムや法律から造る。早稲田はそこに住む人の声を聞き、町を造っていく」と、早稲田の存在意義を聞きました。カンボジアはまだまだ発展途上国ですので、国を造る段階です。そのような国だからこそ、早稲田の在野精神はとても有効だと思っています。カンボジア稲門会のメンバーがそれぞれに活躍し、カンボジアに貢献するきっかけにしたいと思います。
奥田知宏(2003年理工、05年工研修)

会員からのメッセージ

2008年にカンボジアで起業して10年、現地の生活環境は劇的に改善しました。特に首都プノンペンには大きなイオンモールが2号店まで開業し、日本食を楽しめるレストランもかなり増えています。貧富の格差は大きいものの、街には高級車があふれ、現地の人々の暮らしも目に見えて豊かになってきています。カンボジア稲門会はまだ発足したばかりですが、さまざまな形でカンボジアに向き合われている皆さんとの交流に良い刺激を頂いています。
高 虎男(1997年政経)

学生時代に訪れたカンボジア。貧しさに驚き、いつかはこの地でとの意を強くしました。15年後の今日、政府開発援助の仕事でシハヌークビル港開発などに携わっています。今やイオンモールもある成長国。「ありがとう」と言われる時代も終わり、「Win-Win」となる案件を進めつつ、進出著しい他国との競争・協調にも頭を悩ます日々です。
生活の支えとなっているのが稲門会です。勤

め人、起業家、NPO職員、学生、医師やカンボジア人の元留学生など、両国のために活動する間に刺激を頂いています。
安原裕人(2005年政経)

卒業後カンボジアに帰国し、現在は日系の総合商社で働いています。在学中はカンボジアと関わりのあるさまざまな学内の学生団体と一緒に活動し、充実した学生生活を過ごしました。その中で早稲田の縁で入学前に知り合った妻と再会でき、昨年結婚しました。自由な校風が大好きだったので、今も早稲田とのつながりを持つことや稲門会でさまざまな世代・業界の方々を知り合える機会に感謝し、うれしく思っています。今後も稲門会への参加が楽しみです。
テア・セアンヒー(2010年商研修)

建築設計の仕事で20年前にカンボジアの地を踏んで以来、レストランやNGOの運営にも携わっています。そのような中、世界的観光地であるアンコール遺跡群に隣接する地域にさえ中学校がないことが分かり、2013年に中学校を設立しました。その場所がちょうどアンコール時代の都であったアンコールトムの北西に位置することから、将来のアンコールの「都の西北」を目標に、創設時の母校に思いをはせながら活動しています。
小出陽子(1990年理工、92年工研修)

カンボジア稲門会について

カンボジア稲門会は2016年10月に発足し、現在の会員数は約60人。そのうち15人ほどは早稲田大学で学んだカンボジア人留学生です。20代～40代の若い世代がほとんどですが、中にはカンボジアの内戦(ポル・ポト政権時代)以前の1960年代に、カンボジアで旅行業を起こされた大先輩もいらっしゃいます。会の活動は、プノンペンでの懇親会や早慶イベントを年に5回ほど、シエムリアップなど地方都市での見学会と懇親会を年1回行っています。「進取の精神」で日カン両国の絆が生まれるような会を目指しています。
松田詔子(2011年国際教養)



懇親会(2017年6月)

カンボジアの魅力

1970年代後半のポル・ポト政権時代に数百万人ともいわれる国民が虐殺された歴史があるカンボジアですが、90年以降の和平の実現には日本政府も深く関わってきました。カンボジアといえばまず思い浮かぶのは、世界遺産の「アンコール遺跡群」。遺跡の保全と修復および人材育成を目的とした日本国政府アンコール遺跡救済チームが94年に結成され、その団長として指名されたのが建築学科の中川武先

生でした。この25年間、アンコールワットやバイヨン寺院などで調査や修復事業を行い、早稲田大学の多くの先生や学生、そして校友が事業に携わっています。
カンボジアは25歳未満の人口が約50パーセントと若い世代が多い国ですが、それだけに今後の発展へのパワー、日々の活力がみなぎっている国でもあります。チャイナプラス1としての企業進出、日本への技能実習生や特定技能外国人の派遣国としても注目され始め、日系企業の進出が増えた2010年～15年には、およそ1,000社の商業省登録を記録しました。

一方、農村部は電気や道路などのインフラ整備が立ち遅れ、教育も十分に行き届いていない状況ですが、豊かな自然と人々の昔ながらの営みや笑顔は、訪れる人々をとりこにする魅力にあふれています。
そのような両義的な魅力の中でさまざまな可能性を見いだせる国、それが手の届く範囲で実現できる(できそうな)国、人々の笑顔とともにずっとここにいたいと思わせる国、それがカンボジアと言えるでしょう。

小出陽子(1990年理工、92年工研修)



修復に日本も関わっているアンコールワット

バイヨン寺院遺跡修復現場で行った第1回見学会(2018年1月)

